

メトロ・アルキテトス

サンパウロ派:メトロ、「第3世代」

フェデリコ・ブッチ、アンジェロ・ロレンツィ

参照 | 本誌pp.3-31

本日のサンパウロの日刊紙『Folha de S. Paulo』は、市内の犯罪発生率を示す気がかりな地図を全面を使って掲載した。年間の犯罪被害者数に基づいて犯罪発生率が増加している地区を、赤のグラデーションで塗り分けた地図だ。その結果、巨大な赤い斑点が、サンパウロ中心部を囲むアヴェーラ地域の上に広がった。サンパウロの住民は約1,100万人もいて、その半数はイタリア移民の子孫とされる。彼らは、この南半球最大の大都市の暴力的な側面をよく知っているのだ。

喜ばしいことに、40歳前後の有能なブラジル人建築家、

マーティン・コルリヨン、グスタヴォ・セドローニ、マリナ・ヨシイが主宰するメトロ・アルキテトス・アソシアードス事務所は、近代主義的都市サンパウロ中心部の比較的閑静な地域にある。共和国広場に近いジェネラウ・ジャルジン通りだ。これはおそらく世界で最も建築家の密度が高い通りと言えよう(1kmあまりの長さに50を超える建築事務所がひしめいている)。その1人が1928年生まれのパウロ・メンデス・ダ・ローシャだ。現代建築の巨匠であり2006年にプリツカー賞を受賞した彼と、メトロ・アルキテトスは2000年の事務所設立以来ずっと協働関係にある。

ジェネラウ・ジャルジン通りは、サンパウロ建築の特質を把握するのに戦略的に適した地点である。また建設技術への着目、鉄筋コンクリートの使用、都市と自然のランドスケープの複雑なフォルムとの関係性——ジョアン=バ

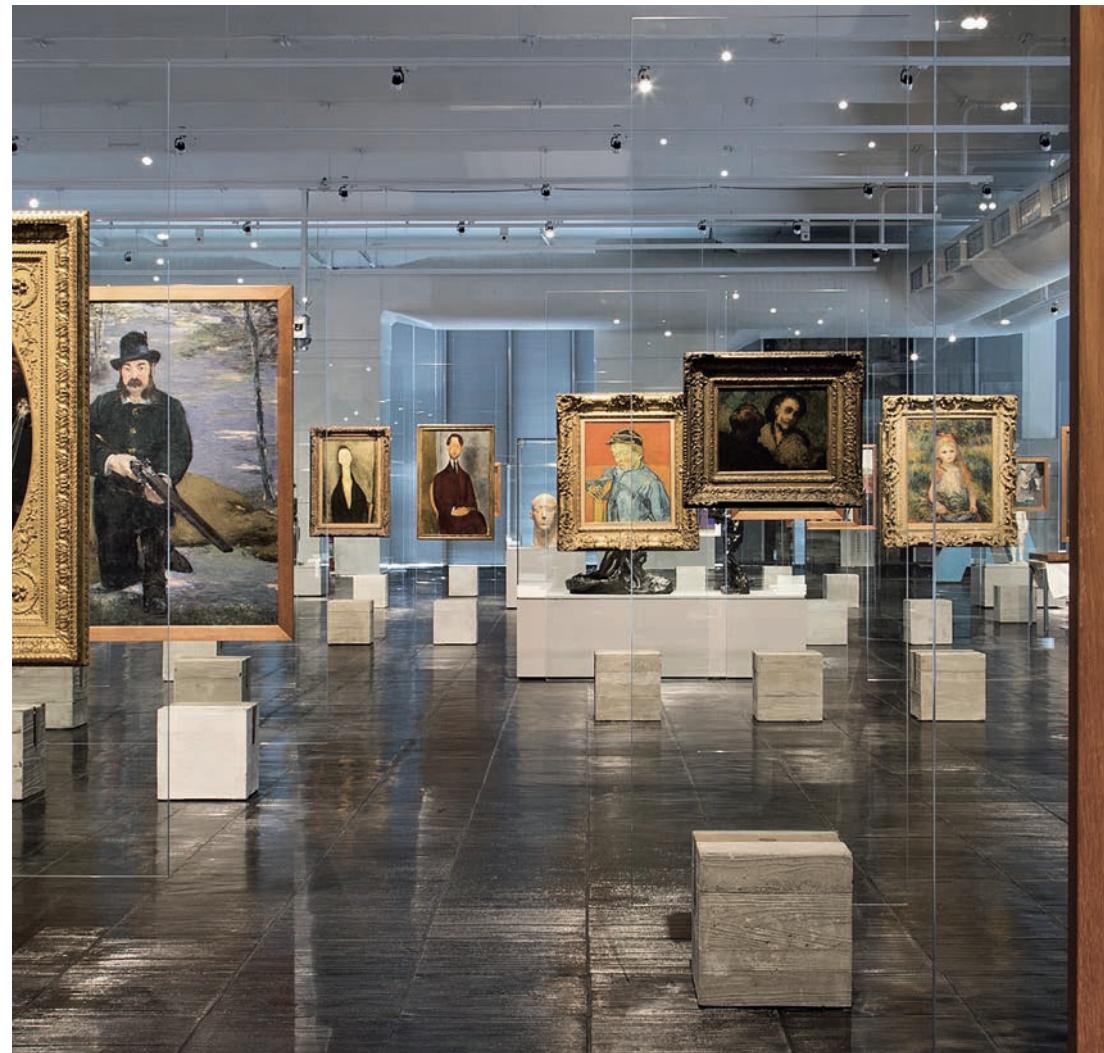
ティスター・ヴィラノーヴァ・アルティガス(1915-85)を先駆とするサンパウロの建築家の作品を特徴づける諸要素——は、メトロ・アルキテトスの探求の中で最も魅力的な特徴に数えられる。

アルティガスの最初の弟子だったメンデス・ダ・ローシャからメトロの建築家たちが学び取ったのは、プロジェクトを理論的に構築し、限りない情熱と鍛錬された能力をもって、解よりもまず問題を見極める姿勢であり、また言うまでもなく、建築的であり都市的である空間にさまざまなオブジェを「提示する技」への特別な感性である。その点は本稿で紹介する選りすぐりの作品によって証明されよう。

今回取り上げる作品のなかには、サンパウロにある民営の2つの展示パヴィリオンが入っている。1つめは「ヌオヴァ・カーサ・トリアングロ(新三角形の家)」と名付けられたもので、往来の激しいエスタドス・ウニドス通りと対峙する大きなボリュームである。2つめの作品(アート・パヴィリオン)は大規模なヴィラの庭園内にあり、段状テラスになった、異なる高さに分かれた緑地の中央に置かれている。これは機能とフォルムの異なる3つの建物に分かれている。1つめの建物は細長い、鉄筋コンクリート造の2階建てのボリュームで、建築主の芸術コレクションが収蔵されている。2つめの正方形のボリュームは、ゲスト用の宿泊施設として使われる。3つめは木造のパーゴラで、プールと住宅の付帯設備とされる。

メトロ・アルキテトスの仕事において、展示、そして場との関係というテーマは、歴史との対話を目指す、建築の政治・社会的次元への強い関心に支えられている。

1968年にリナ・ボ・バルジ(1914-92)が建てたサンパウロ美術館(MASP)はパウリスタ大通りに面した巨大な屋内広場であり、この都市の文化的中心である。MASPの再編計画は数期に分かれて現在も進行中である。建物本来の論理を尊重した再編が予定されていた。すでに完成した部分には、リナ・ボ・バルジの設計を下敷きに、常設展示に充てられた大ホールの再編が含まれる。事実、大ホールの展示はラディカルで驚くべきかたちで構想されていた。壁面にかけられた絵画の連続としてではなく、ガラス製のイーゼルに吊られた絵画の群集が空間の中央を占め、絵画が中空に漂うようだった。この素晴らしい展示構造は、イタリア博物館学の黄金時代を起源とする、われわれには親しみ深い特質(以下で掘り下げていく)をもっていた。これが1996年に撤去され、より慣習的な展



サンパウロ美術館・展示計画、進行中

メトロ・アルキテトス

[ヌオヴァ・カーサ・トリアングロ画廊]

設計:マーティン・コルリヨン、グスタヴォ・セドローニ;
Helena Cavalheiro, Marina Ioshii,
Renata Mori, Luis Tavares, Isadora Marchi,
Rafael de Sousa, Juliana Ziebell,
Gabriela Santana, Marina Pereira
構造・設備:Marcondes Ferraz Engenharia;
INNER Engenharia e Gerenciamento; L2C Engenharia
照明:Design da Luz / Fernanda Carvalho
ランドスケープ:Bonsai Paisagismo
施工:Lock Engenharia
規模:建築面積 450m²

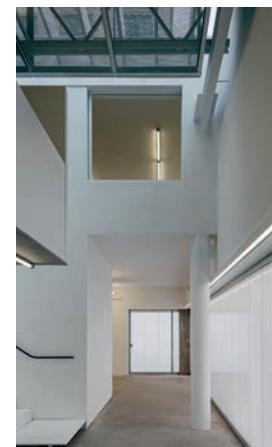
スケジュール:設計開始 2015年3月/竣工 2016年1月

所在地:Rua Estados Unidos 1324, São Paulo, Brazil

参照:本誌pp.16-19



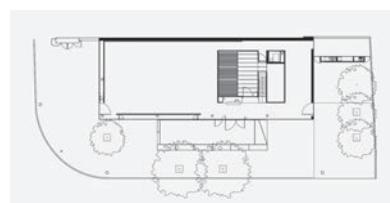
街路側ファサード



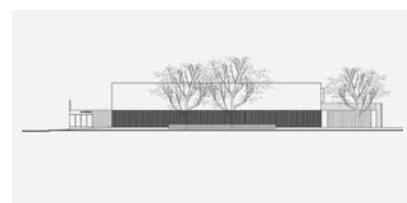
サーキュレーション・スペース



アート・ギャラリー



1階平面図



立面図

[アート・パヴィリオン]

設計:マーティン・コルリヨン、グスタヴォ・セドローニ
プロジェクト・リーダー:マリナ・ヨシイ
設計チーム:Bruno Kim, Francisca Lopes, Isadora Marchi,
Luís Tavares, Marcelo Macedo, Rafael de Sousa
構造:Companhia de Projetos, Heloisa Maringone
パーゴラ木造構造:Ita Construtora, Hélio Olga
電気設備:Sinsmel, M. Lindolfo Batista
照明:Lux, Ricardo Heder
ランドスケープ:Bonsai Paisagismo, Ricardo Vianna
プロジェクト・マネージメント:Marcondes Ferraz Engenharia
規模:敷地面積 2,040m²/建築面積 250m²(パヴィリオン)
スケジュール:設計・施工 2012年4月-13年6月
所在地:São Paulo, Brazil
参照:本誌pp.20-24



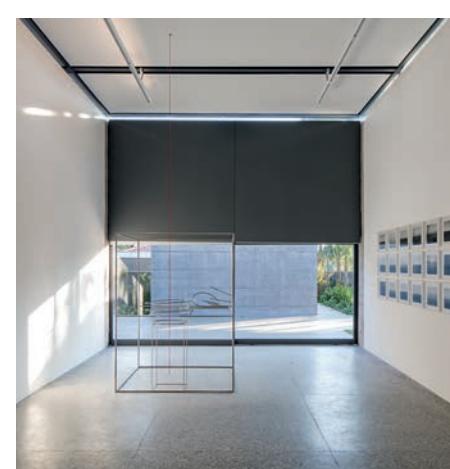
展示ギャラリー



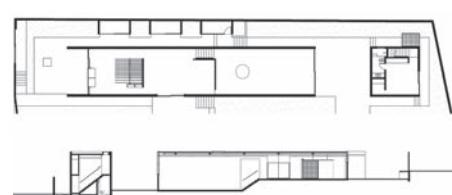
パーゴラ



ギャラリー入口



ギャラリー内部



平面図/断面図

イニエス・ロボ

「ルイス・ダ・シルバ・リベイロ市立図書館・州立文書館」

設計=イニエス・ロボ・アルキテクトス

都市の灯 フェデリコ・トランファ

参照 | 本誌pp.48-59

「火を吐く山々、風、孤独」。16世紀、ここに最初に上陸したポルトガル人探検家の一人は、アゾーレス諸島についてそう書いている。「大西洋の真っただ中、ヨーロッパとアメリカのちょうど中間あたり、北緯36度55分と39度44分のあいだ、経度25度と31度間に位置し、サンタ・マリア、サン・ミゲル、テルセイラ、グラシオサ、サン・ジョルジエ、ピコ、ファイアル、フローレス、コルヴォの9つの島で構成される。群島は北西-南東にかけて約600kmの距離に広がっている。アゾーレスという名は、最初のポルトガル人航海者たちが、これらの島の岩礁に棲息するたくさんのトビをハイタカ(ポルトガル語ではaçores)と間違えたことに遡る。ポルトガルによる植民地化がはじまったのは1432年であるが、同じ時期にアゾーレス諸島は、フランドルとポルトガル王家とのあいだに結ばれた婚姻関係によって、フランドルによる著しい植民地化の対象にもなった。(……) 土壌は元来、火山性である。海辺の断崖はしばしばシーツを広げたような平板な非常に硬い溶岩でできているが、平らな地域には軽石の粉状化したものに被われていることもある。風景の地形的特徴は、まがいなく火山活動と地震

があつたことを示している。(……) 火山噴火についてのデータは無数。最大の被害をもたらした地震は1522年、1538年、1591年、1630年、1755年、1810年、1862年、1884年、そして1957年に起きた。主にテルセイラ島が被害を受けた1978年の地震の跡は、今でもアングラに滞在する旅行者が見物できる。(……)

アゾーレス諸島の気候は、温暖で多雨だが、降雨時間は短く、夏は非常に暑い。自然是生き生きとしていて、植物の種類は無数』[アントニオ・タブキ『ポルト・ビムの女』、パレルモ、セリオ、1983 | 邦訳書:『島とクジラと女をめぐる断片』須賀敦子訳、青土社、1998]。

アングラ・ド・エロイズモはテルセイラ島の中心都市である。教皇パウルス3世がこの島をアゾーレス諸島の教区本部に選んだ1478年に、都市に格上げされた。この地の長い歴史の中で、ポルトガル王国の首都だったこともある。都市のモニュメンタルな遺産の点で見ると、アングラは群島の心臓部であり、ポルトガルの最も重要な旧市街のひとつに数えられる。物理的な距離をものとせず、ポルトガルの大陸部と島部との交流は常に盛んだった。したがって、比較的少ない人口にもかかわらず、アゾーレス諸島の都市は堅実で活力ある組織に恵まれていた。

ルイス・ダ・シルバ・リベイロ市立図書館・州立文書館は、2008年に始まり2016年に終わった道程のプラスの成果である。設計したイニエス・ロボは、ポルトガル現代建築の著名な解釈者の1人だ。本誌の読者はポンタ・デルガーダ



市街より見る

のアゾーレス大学のオーディトリアム、エヴォラ大学芸術・建築学部、フィゲイラ・ダ・フォスのジョアキン・カルヴァーリョ高校(『CASABELLA』732号[2003]、818号[2012]、839/840号[2014])の紹介記事を通して、すでに彼女のことを知っている。

先行作と同じく、アゾーレスの図書館・文書館も公共機関による設計競技から生まれた。これは、ポルトガルでは、過去10年間に影を落とした経済的困難にもかかわらず、教育と文化への投資をやめなかつたという事実の証である。その点から見ると、ルイス・ダ・シルバ・リベイロ市立図書館・州立文書館の完成は、首都リスボンから遠い場所



中庭より南を見る



中庭より北側ブロックを見る

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。

©2018 Arnoldo Mondadori Editore

©2018 Architects Studio Japan

マックス・ドゥドラー

「ハイデンハイム市立図書館」設計=マックス・ドゥドラー

模範としての都市 ジョヴァンナ・クレスピ

参照 | 本誌 pp.60-69

ヘレンシュタイン城は、眼下に広がるハイデンハイム・アン・デア・ブレンツの都市より約100m高い丘の頂に建つ。市の中心部に迫るような城の存在は、どっしりとして多様なボリューム群によってその歴史を物語っている。中世から今日まで、火災や戦争をくぐり抜け、建材を求めての略奪にも遭った。城を築いた領主ヘレンシュタイン家から、ヴュルテンブルク公の支配に移り、最終的に現在の城砦・交通博物館になった。

シリnder形の塔からは、城塞を取り巻く豊かな植生のみならず、都市を眺められる。その街並みには、分解され断片化されたものの集合体から出発した、戦後の再建と拡張の結果である都市の歴史がはっきりと読み取れる。

ハイデンハイム市は、フランスおよびスイスと国境を接するドイツ南西部のバーデン・ヴュルテンブルク州に属す人口

約5万人の都市である。2013年に同市は市立図書館建設のための設計競技を行い、計画エリアとして旧刑務所の跡地を指定した。均質でコンパクトな旧市街と、東側に広がる無秩序な郊外地区との境界に位置し、常に人を寄せ付けない場所だった。

スイス人建築家マックス・ドゥドラーは、設計競技を勝ち取るにあたり、その設計案によって図書館とそれを取り囲むものとの相互関係と対話を打ち立てる重要性を主張した。それは歴史的な都市とその拡張部分との間にも敷衍され、旧市街の特質に従いながらも、新都市との対立や断絶に陥ることなく、さまざまな連関と相互参照を構築するための連続的な動きを作ろうとした。

新築された図書館は、指定された敷地全体を占めるよう縦に伸びる。規模と比例のモデルとして、三角屋根の住宅が直線的に並ぶ近隣の既存の街並みを参照している。

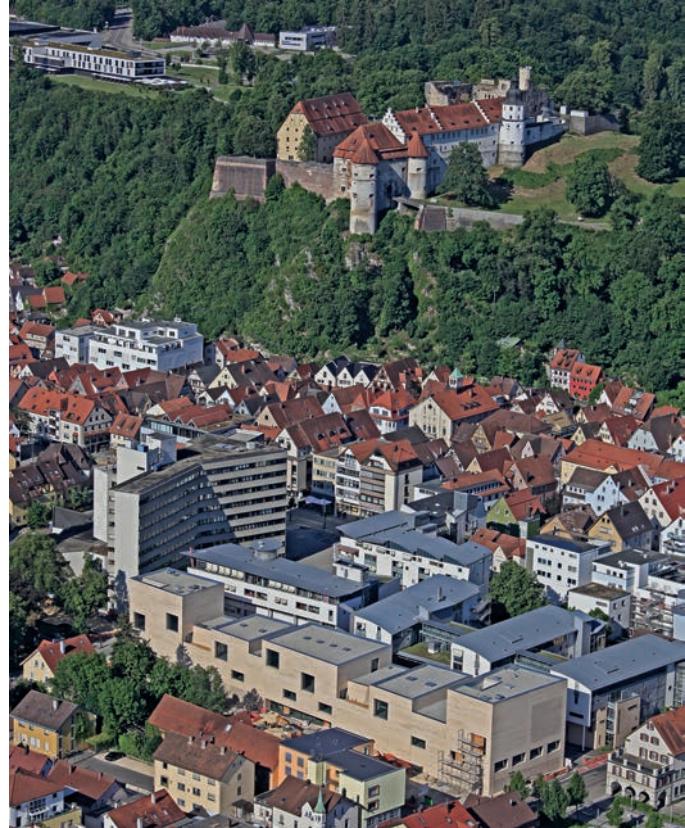
フンボルト大学の中央図書館が置かれた有名なヤコブ&ヴィルヘルム・グリム・センター(2004-09)は、約10年前にドゥドラーによってベルリンに建設された(『CASABELLA』786号、2010)。それとは反対に、この建物の建築的性質を

支配するのは建築タイプの原型よりも、図書館の有機的な体系に積極的に参入する都市である。

建設地特有の制限のある条件は、かつて刑務所に用いられたことでさらに強められ、この場をさらに孤立させた。したがって、新図書館の設計案が狙いを定めたのは、隣接する都市の街並みとの失われた、あるいは作られたことのない絆を結び直し、新たな関係性を構築することだった。

敷地の細長い形状によって、設計案は空間構成と機能の面で特異な性格を帯びることになった。その最初の発露が連続的な都市的ファサードの建設である。そこでは、図書館の建物が複数の建物をひとつひとつ並べた結果に見える。外からは1階建てに見えるボリュームは、それよりも大きいボリュームと交互に配置され、まるで都市のプロフィールのアイコンのような抽象的な輪郭を思わせる、規則的に切り取られた造形にデザインされている。

ファサードのシンコペーションのリズムを強めている要素のひとつは、矩形や長方形の開口部の可変的な配置で、これが内部空間の理解を攪乱させる。もうひとつの要素



山上にヘレンシュタイン城、下に図書館を見る



南側ファサード



北東より見る



ロッジアより見る



交差点より見る



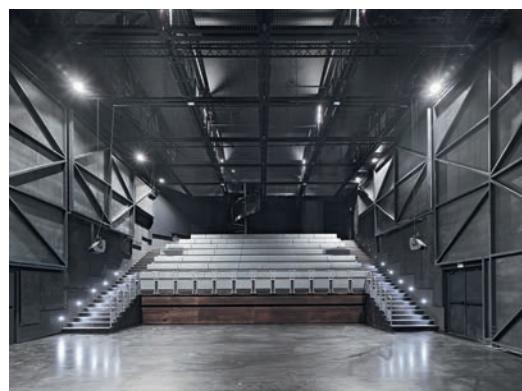
中庭

ディトリアムを完成させた。その特異な造形は、敷地の長方形よりもむしろ、バラバラで匿名的な街並みに起因する。低層家屋や集合住宅から構成された街並みは、戦災による数々の破壊の跡に形成された。そのひとつの証拠がメルラン実験都市であり、現在は国定記念碑と見なされている。複数の場所に分散した多様な文化活動をダンスと音楽のための单一の建物に集め、際立つ個性を与えることが、建築家から提案された計画だった。彼

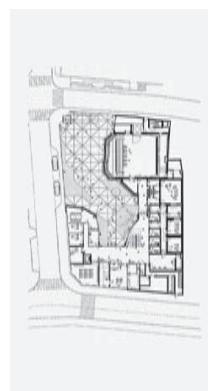
らの決定は、ヴォイドの周縁にヴォリュームを設置するというので、その目的はノワジー=ル=セックの町に新たな公共空間を与えることにある。

この空間のデザインから、建物全体を特徴づける鍵が引き出されるように思われる。現に、この広場は矩形のグリッドを起点に造形されている。グリッドの四角形は斜線で分割されて三角形の「モデュール」を生み出し、それが舗装のデザインにも外被のデザインにも、開口部

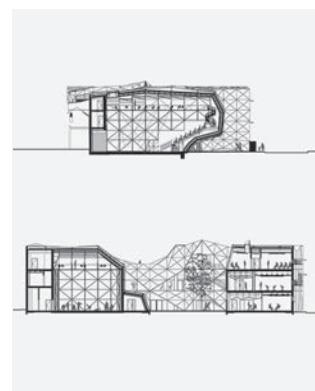
のない壁にも、あるいは閉じた壁とガラス壁が交互に現れるファサードにも用いられている。U字平面の内側の広場を囲むファサードは、この外壁仕上げで覆われている。その一方、周囲の車道に面したファサードはコンクリート仕上げとされた。これら街路側のファサードは高い壁に似ている。そこから、幾何学的装飾と鮮やかな色で彩られた1枚の連続壁のように、中庭に面した連続ヴォリュームを覆う仕上げが吊り下げられているように見える。この効果は変形によって強調されている。色のついた面と透明な三角形で構成された外被を変形することによって、また内部の諸機能の配置の変化を暴くような突出物のさまざまな遊びによって、伝統的な耐力構造に被せられた単なる覆いという本質が浮き彫りにされる。さらに、小オーディトリアムのある位置で、三次元グリッドを構成する三角形のヴォリュームをひとつ引き抜くことによって、被膜の存在が強調される。この地点で、以上のようにデザインされた外被の織目がはつきりと現れる。オーディトリアムに座って内側から壁を眺めると、ジャコブ+マクファーレンが本作において、表皮と骨格の分離という造形的意味と徹底的に対峙しようとしたという感覚を



オーディトリアム



1階平面図



断面図